

令和 7 年度 第 2 回神戸市総合教育会議

と き 令和 7 年 9 月 30 日 (火)

13 : 30 ~ 15 : 00

ところ 神戸市役所 1 号館 14 階 大会議室

神戸市企画調整局大学・教育連携推進課

1. 開　　会

○企画調整局大学・教育連携推進課

それでは、定刻となりましたので、ただいまより令和7年度第2回神戸市総合教育会議を開会させていただきます。

以降の進行につきまして、久元市長、よろしくお願ひいたします。

○久元市長

本日は総合教育会議に御出席をいただきまして、ありがとうございます。

今回は子供の学力について、どういう要因が影響を与えているのかということ。その大きな要因の一つとして、特に最近議論されているのが、スマホに長時間耽溺することによる影響などが言われておりますので、今日は事務局のほうから、このテーマについての今の文部科学省における学力の状況調査などと、それから、教育大綱の中では子供の学力などに関する科学的な調査研究を進めるということ、このテーマについてこれまで議論したこと�이ありませんでしたので、そういう観点からもこの問題について議論できればと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、事務局のほうから、全国学力・学習状況調査の結果について、説明をお願いいたします。

○教育委員会事務局副局長

では、資料に沿いまして、教育委員会事務局から御説明をさせていただきます。

2ページ目、目次になりますけれども、全国の学力等の調査結果を御説明させていただきます。後ほど、学力に影響を及ぼしているとも言われておりますスマホに関して、学術論文、それから、文献について御紹介をさせていただきます。その後、これまでの神戸市の取組について御紹介をさせていただきます。

では、3ページになります。この総合教育会議での協議を経まして、平成28年1月に市長が定めました教育大綱の抜粋でございます。7番目に「教育に関する科学的な調査研究を進めます。」とございます。1段落目にもありますとおり、本日は学術論

文・文献を幾つか掲載させていただいております。

では、文部科学省がこのたび公表いたしました調査結果を2件、御説明させていただきます。

まず1件目でございますが、令和7年度の全国学力・学習状況調査の結果でございます。令和7年4月に小学校6年生と中学校3年生を対象に教科に関する調査及び児童生徒質問調査を実施いたしました。

次に、各教科の結果でございます。小学校におきましては、国語・算数は全国をやや上回り、理科は全国と同水準。中学校におきましては、数学は全国をやや上回り、国語と理科は全国と同水準という結果が出ております。

続いて、児童・生徒への質問調査の結果になります。「学校外での勉強時間」が小学校では横ばい、中学校では減少傾向。「授業の理解度」につきましては、小中ともに減少傾向ということで、前のページで御説明いたしました学力調査の結果の動向とは異なりまして、全国平均よりも低くなっているという状況にございます。「自分で考え自分から取り組んだ」という項目につきましては、小学校は増加傾向。「授業時におけるICT機器の使用頻度」につきましては、小・中学校ともに大幅に増加しております。

続いて、それぞれの結果をクロス集計しております。以下の説明内容は神戸市の内容を記しておりますが、全国的な傾向と同じ傾向となっております。

一つ目でございますが、主体的・対話的で深い学びに取り組んだと答える児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向にある、授業がよく分かる児童生徒ほど、各教科の正答率・スコアが高い傾向が見られる、ということです。

児童生徒のICT機器を使用する頻度と各教科の正答率の間には、グラフにあるような一定の関係性が見られるという分析がなされております。

次に、調査結果の2件目になりますが、令和6年度の経年変化分析調査、それから、保護者に対する調査でございます。

こちらは市内の学校の一部が標本学校に含まれておりますが、全国の調査結果として公開されたものでございます。経年変化分析調査としまして、全国的な学力の状況について、経年の変化を把握・分析するものと、家庭状況と学力等の関係につきまして、経年の変化を把握・分析しようとするものです。下に標本学校数を示しておりますが、全国で小学校につきましては6万人、中学校におきましては14万人を対象としています。

経年変化分析調査の結果概要ということで、国のスコアの推移でございますけれども、中学校の数学を除きまして、小学校の国語・算数、それから、中学校の国語・英語についてはスコアの低下が見られたということで、この辺りが大きく報道もされたところでございます。

社会経済的背景、SESと呼ばれるものでございますけれども、国際学力調査でも代表的な項目として長年使用されているものでございまして、学力との相関が高いことが確認されているものでございます。SESの指標としましては、家庭の蔵書数、家にある本の冊数が活用されているということでございます。このSESが低いグループほど経年変化分析調査のスコアが低い傾向が見られました。SESが低い層のほうがスコアの低下幅が大きいという状況が確認されています。

続いて、保護者に対する調査結果を紹介させていただきます。児童生徒の学校外での過ごし方、平日の数値を示しておりますが、小・中学校共通して言えることですが、学校外での勉強時間が前回調査よりも減少していること、テレビゲームの使用時間は前回調査から増加していること、スマホの使用時間も前回調査から増加していることが調査結果から見えてきました。ここには示しておりませんが、勉強時間が1時間以上と回答した割合が、小学校6年生で言いますと、令和3年度の44.9%から37.7%に低減。中学校では、同じく1時間以上勉強したという生徒が68.1%から58.9%に減少しております。

続きまして、同じく学校外での過ごし方ですが、学校外での勉強時間が長いほどス

コアが高い、テレビゲームの使用時間が長いほどスコアが低い、スマホの使用時間が一定時間を超えるとスコアは低下する、という結果が出ております。ここで使用時間の一定程度とありますのは、下の棒グラフに示しますとおり、中学校で見ますと、スマートフォンの使用時間が30分以上1時間未満というところが、スコアが最も高いという結果が出ております。グラフにはスマートフォン・携帯電話の使用時間の割合が表示されています。

続いて、学校外の過ごし方に影響を与えるものとして、保護者の意識・働きかけという設問がございました。計画的に勉強するように子供に促している保護者の子供のほうが勉強時間は長く、それから、学校生活が楽しければ良い成績を取ることにこだわらないと回答した保護者、これは前回調査から割合は増加しているのですが、そのお子さんのほうが、勉強時間が短いと。一部分析では、コロナ禍を経て、不登校にならずに学校に行ってくれば良いというような保護者が増えてきたといった分析もされているようです。ゲームの時間を限定している、それから、スマートフォンルールを守るよう促している保護者の子供さんのほうがゲーム・スマートフォンの時間が短く、ルールをつくって、そのように促している保護者数は増加傾向にあるということのようです。最後に、保護者のゲーム・スマートフォンの時間が長いほど、その子供のゲーム・スマートフォンの時間も長いということでございます。

同様に、学校の授業でございますけれども、国語、算数・数学の授業がよく分かる児童生徒、それから主体的・対話的で深い学びに取り組んでいる児童生徒のほうが、勉強時間が長く、テレビゲーム、SNS・動画視聴の時間が短いという結果が出ております。

参考資料になるのですが、子供の生活状況に関する実態調査、令和3年度のものを添付しております。これはSESの御説明をさせていただきましたが、本市においてもこのような調査をしております。

ここまで御説明させていただいた学力に影響を及ぼす要因、保護者の関与等について、要約を添付しております。

続いて、学術論文・文献に移ります。東北大学の川島隆太教授、これは書籍でございますけれども、「スマホが学力を破壊する」ということで、学力低下は、スマホ等を長時間使用することによって生じる家庭での学習時間の短縮、睡眠時間の短縮よりも、直接スマホ等を使用したことによる影響のほうが大きいと示されておりまして、脳の前頭前野の発達に影響を及ぼす可能性があるということが述べられております。

森上敏夫様による岡山県をフィールドとした家庭生活、家庭学習についての調査でございます。岡山県、それから、秋田県が学力調査のトップクラスになるのですが、この二つのデータを比較しまして、岡山県の課題を明示したものでございます。スマホやゲームの使用時間が長いほど、平均正答率が低下する傾向にあるということ。以下、文部科学省の分析結果と同様の指摘をなされております。

次に「LINEの利用傾向および受信メッセージ念慮性と学力の関連」ということで、都内の私立中学校の生徒175人に調査をしたようです。利用時の心理的傾向を念慮性と呼んでいますが、学力に影響している可能性がある、それから、家庭学習時にスマホを別の場所に収納しておくことで、学力が高くなる可能性がある、ということが示されております。

携帯キャリアでもありますNTTドコモの研究所様が出されたものでございますが、SNSの利用は、小・中学校の人のつながりを深め、拡大させる正の側面がある一方で、高頻度利用者の特性として、小・中学校の両方におきまして、親と子が直接会話する時間が短いということで、これまでに御説明しました経年変化の結果と併せて見ますと、学力への影響も気になるところかというように考えられます。

海外の事例でございますが、インドの事例でございます。長時間のスマホの使用は、子供の認知機能や姿勢に悪影響を及ぼすということで、72.2%の子供さんに姿勢の問題、特に頸部、この辺りが確認されたということが示されております。

茨城大学を中心としたもので、「中学生におけるスマホ使用が健康関連要因に及ぼす影響」というまとめをされております。スマホの使用時間が1日2時間以上、SST、

スマールスクリーンタイムと一番上に書いておりますが、これが6時間以上の生徒につきましては、様々な健康・生活上の問題が有意に関連しているということでございます。

学力と併せて、少し体力のほうも拾って参りました。「児童の体力並びにスクリーンタイムと心理的ストレス反応との関連性」というものでございます。体力水準が低い児童につきましては、スクリーンタイムが長い、外遊び、課外活動時間が短い、欠席日数が多く、無力感のスコアが高い傾向にあるとまとめられております。

以上、一部紹介させていただきました学術的知見ということで要約をさせていただいております。

本市の取組ということで、まずはスマートスマホ都市KOBExについてまとめております。

この名称につきましては、下に書いておりますとおり、平成29年のスマホフォーラム、全国で初めてスマホ世代の中学生が市長、有識者と議論する場として開催したフォーラムの中で命名をされております。

次のページにかけて記載させていただいておりますが、令和3年度第1回の神戸市総合教育会議にて、兵庫県立大学の竹内和雄先生にお越しいただき、講演をいたしました後、皆さんで議論をいたしましたということがございました。そのテーマとその会議後の取組について紹介させていただいております。

また、子どもの居場所フォーラムということで、子供が外遊びできる協働の居場所づくりに関するフォーラムも開催させていただきまして、子供の「やりたい」を尊重し、主体的な遊びを支援する環境づくりが重要であるという結論も出ております。

スマホと付き合う手法や考え方を三つのブロックに分けてまとめさせていただいております。

最後に、子供の学力とスマホに関する施策例ということで、今までに取り組んでいるもの、それから、今後考え得るものと事務局のほうでまとめさせていただいており

ます。

事務局からの説明は以上となります。よろしくお願ひいたします。

○久元市長

ありがとうございました。

それでは、全体はつながっているわけですが、三つのパートに分かれると思います。

まず全国の学力・学習状況調査、これは神戸市と全国と両方あるわけですが、この状況調査からどのようなことが読み取れるか。あるいは、これをどう見たらいいのか。

その辺りの御意見や、データに関する御質問でも結構ですので、お伺いできればと思いますが、いかがでしょうか。

○正司委員

学力・学習状況調査の結果については、我々もやはりどうしても気になりますので、毎年結果を様々分析し、教育委員会で議論させていただいている。

平均値はそこまで悪いスコアではありませんが、なぜかよく分かるという理解度のスコアが経常的に少し低いということが続いている点がやはり気になるところであります。それとともに、今回は平均値だけ掲載されていますが、分散データを見ていると、やはりちょっと下がっているところは分散が広がっているような形になるので、それは学力差が出ている心配があるなという議論を教育委員会でもさせていただいたことがあります。

一方で、添付されている学術論文や文献でも様々研究されていますが、この分野は普通の実験室のように実験はできないので、因果関係をはっきりさせながら分析するには非常に難しい分野だと思っています。その中でも、皆さんのが苦労して分析された結果は、やはり尊重すべきだろうと思っています。

一方で、元へ戻りますと、理解度が低い値になっている点はやはり気になるので、例えば、中学校の数学のスコアはそこまで低くないが、理解度のスコアが低いということは、ひょっとすると問題をちゃんと読めていないのではないか、いわゆる数学の

学力ではないところで引っかかっているのではないかという点も気になつたりしているところあります。

それと話は変わりますが、SES、社会経済的背景の指標として家にある本の冊数で測るということを、この分析結果で教えていただいて初めて知りました。子供たちを育てる上での広い意味での学力の中においては、家庭の環境も大切だし、本と接する機会をたくさん持たせることも大切だということを共通認識として理解したところです。

ちょっと感想めいたことばかりで恐縮ですが。

○本田委員

私もこの学力低下ということは、一つの要因ではなく、様々なものが複合的に絡み合っているので、本当に難しい問題だと思っています。今回の調査結果から、やはり家庭でのサポートが、特に現代の子供たちにはすごく重要なのかなということは感じました。例えば、スマートフォン一つでもそうだと思うが、使い方や、親子関係の会話が少ない多いというところも影響因子として上がっているところを見ると、やはり教育委員会としても、子供たちだけにアプローチするのではなくて、家庭、家族を巻き込んでのアプローチが必要だとつくづく感じた次第です。

○今井委員

私も含めて大人、あるいは子供もある程度の年齢になってきたら、様々な悪影響があるから、これではいけないと分かっていながらも使ってしまうのがスマホやネットでして、なかなかコントロールできずに今に至っていると思います。今回まとめていただいている調査結果を見ると、ぼんやり不安に思っていた、分かりつつも何ともできていなかつたことが、やはりこういう結果につながっているのかということが率直な感想としてあります。

今回の時間に関する調査は保護者調査なので、お子さんに実際に使っている時間を聞いたら実はもう少し長いのかもしれません、学校外での時間の過ごし方として、

スマホやゲームに時間をかけて、勉強時間は減っている。それはやはり学力への影響も当然あるだろうということが如実に出ているのではないかと感じています。ですので、この経過や調査結果を、いかに子供や保護者に分かりやすく伝えていくかというところが大事ではないかと思います。しっかり分かりやすく伝えることで、自分たちで何とかしていかないといけないという気持ちの変化や機運を高めていくことが大事なのかなと感じています。

○久元市長

ありがとうございました。ほか、いかがでしょうか。

○山下委員

私、特に注目させていただいたのが、今回、全般にスコアが低下しているのですが、中でもSESが低い層のほうがスコアの低下が大きい状況が確認されたということで、結構大事に捉えないといけないことがありました。

今、個別の学習をどうやって進めるかというような論点もあって、それはそれで非常に重要ですけれども、じゃあ、やりたいようにやってもらったらいいですよとする、特にダメージが大きいところで、更にダメージが大きくなることが見えてきているので、少なくとも今までのようなやり方でしてしまうと、放任に終わってしまうところが見えてきていると思います。そのこととの関連で考えると、やはり好きに生きたらいいんだよと言いつつも、好きに生きるということの質を大人と子供の間、あるいは子供同士で問い合わせるような工夫や働きかけが大事になってくるのかなと思いました。

○久元市長

はい、ありがとうございました。

○吉井委員

データで見ますと、小学校、中学校とも授業でのタブレット等のICT機器の使用頻度が著しく増加しています。これは、いわゆるGIGAスクール構想で、タブレットを使

った授業が顕著に増えているのだと思いましたが、一方で、その結果に学力も著しく低下しているということも入っています。これは様々分析されていますように、家庭での勉強時間が少ないとか、そういったことにも要因があるのだと思いますけれども、学校でタブレットを増やしたにもかかわらず、それがあまり成績につながっていないというところがすごく気になります。知識、あるいは学習能力を高めるために本当に役に立っているのかなと。少し言い方が厳しいですけれども、そういうようなことをデータから読み取っています。

○久元市長

はい。しかし、巨費を投入してタブレット端末を入れてきたわけですよ。今、吉井委員から、むしろそれが学力の低下を招いているかもしれないというお話がありました。これは全国一斉に導入されたので、神戸市だけの問題ではないかもしませんけれども、しかし神戸市にとっても大きな問題で、これはどう考えたらいいでしょうね。

○本田委員

この取組自体が新しかったので、タブレットを導入したときの皆さんに戸惑いや、うまく使えるまでに少し時間がかかるているということがあるのでないかと思っています。タブレットやPCを使わないという選択肢は今後ないと思うので、教育のところに導入するのは当たり前なのかなと思うのですが、やはり教育の質といいますか、授業の質をより向上させるための使い方が問われているのかなと私は感じています。というのは、今回出てきていないのですが、私も少しほかの海外の研究とか調べたところ、学力が落ちてきている原因は様々言われているのですが、学力を上げる要因の一つには、教員の質や授業の質が関係しているという結果も出ておりますので、そういったところが今後重要になるのではないかと思っています。

○久元市長

今後どうするのかという議論については、データや学術論文に関する見方や考え方等を議論してからのほうが良いかと思っていたのですが、本田委員から教え方の問題

や、まだ時間がそんなに経っていないというところからお話をありました。教え方の問題、教育の質の問題に御指摘があったということは、つまりタブレット端末が導入されたことによって、学力の低下が引き起こされたのではないというお考えなんですね。

○本田委員

直接、タブレット端末が入ったから下がっていると簡単に考えるべきものではないのではないかと思っているということです。必ずタブレット端末にプラスの部分もありますし、世の中の動きとして、無しにするということはあり得ないかと思っているのですが、どう使うか、しかも年齢が小学校から中学校までかなり発達段階が違う中で、どの部分でどのように使うかということを考えていかなければいけないかと思います。

○久元市長

タブレット端末を越えて、デジタル教科書を導入するのかしないのか。私も報道ぐらいでしか知りませんが、今後はそれぞれの教育委員会、あるいは、学校の判断で、デジタル教科書を入れたときに全てデジタル教科書で対応するのか、紙の教科書とデジタル教科書を併用するのか。それとも紙の教科書だけにするのかということを選択できるようにするというような方向性が示されていますね。

そういう中で、海外ではもう紙の教科書に復帰するという動きもあるという報道にも接していますが、私は教育に関して素人ですので、とにかく予算措置をするのが私の仕事です。ただ、予算措置をするにも、入れたけど役に立たなかつたのではないかというような議論が教育委員会の中から出てきたら、私もどう対応したらいいのか、納税者に説明がつかないわけですよ。ということも含めて、タブレット端末、あるいはデジタル教科書の問題はこれから議論されるにしても、これ通底していますよね、結局。通底していると思うので、その辺のところ、御専門の立場から特に山下委員、本田委員から専門的見地からの御所見をお伺いできれば大変ありがたいですが。

○山下委員

専門的と名乗っていいか自信はないのですが、学習以外の面で、デジタル教科書は保存性等に優れている面はあるかとは思います。学習面に関して言うと、おそらく得意な分野や領域、項目があるんだろうということは、各校を視察させていただいて少し浮かんできたような気がします。

例えば、数学の立体図形の単元ですと、紙に書かれたものではなかなか分かりにくいお子さんも、自分の手で動かしてみるとことが可能になります。先生方も工夫されて、立体を教室に持ち込んでいただける方もおられます、試験のときは平面で表されるので、なかなかぴんとこないところが、端末を使う時間を確保していると、大分理解が進んでいるのかなというようなところがあります。

同じように、理科の天文の単元もかなり有効に活用できると思っています。あと、教師が横について反復練習するということになると、かなり難しい面もあるのですが、自分のペースで反復練習ができるという辺りは得意分野のような気がします。そういう得意、不得意がまだちょっと見極め切れない部分があるのかなという気はしていますので、そこを見極めながら使っていくということは考えていく必要があるかと思っています。

○本田委員

私も同じようにやはり得意、不得意分野があるということと、子供の特性によって、紙のほうが勉強しやすい、デジタルのほうが勉強しやすいということもあるのかと思います。医学的な立場から考えると、例えば、就寝前の2時間はスマホ等の画面を見ないほうがいいと言われていますよね。睡眠に影響があるとか。あと、目が悪くなるということもそうです。今日の調査でも出てきておりましたけれども、脳への影響という点では、ちょうどこの先生の講演をお聞きしたところ、集中して何かを見る、何か集中して考えるというときに、スマホのようにデジタルで目の前がチラチラするのが脳に影響を与えるということでした。デジタルなものに触れる時間が長いことが

必ずしもいいわけではないかも知れないと思っているので、全てデジタルになったから良いと私もちょっと思えないのではないかと思っているところです。

○久元市長

家庭の問題はこの後議論するとして、学校の授業、これは小学校、中学校、科目によって違うかもしれません、今、本田委員からは、長時間端末に触れているとチラチラしてきて、身体的な影響もあり得るということでした。授業における端末の使い方やその弊害も意識しながら、どのように授業で使われているのかということ、先生によって違うかもしれません、教育委員会事務局の教師出身の幹部の方から教えていただければありがたいですが。

○教育次長

授業における使い方ですが、端末が導入されたときは、様々な使い方ができるので、とにかくまずは使ってくださいということを我々も学校に投げかけました。ただ、いつまでもそのような使い方ではなく、本当に学習用端末を使ったほうが効果がある部分と、そうではない部分を今少しずつ見極めていっているところでございます。先ほど御紹介いただきましたように、立体図形の単元や、再現を自分でできないような学習の分野などは学習用端末やデジタル教科書を使うことで認識が深まるることは事実だと思います。そういったところは、もちろん積極的に使っていただくよう投げかけているところでございます。

○久元市長

学力に与える影響というのは多面的であることが前提で、今日はその議論をしていくわけですが、端末を使うのに莫大な予算と現場における労力、あるいは国における様々な議論、教育委員会においても議論をしましたが、実際起きてきたことは、学力の明らかな低下が見られるということですね。どう考えたらいいのでしょうか。

○正司委員

その両者を直接結びつけるのは、危険過ぎると基本的には思っています。例えば、

この期間のデータの中には、COVIDの期間も入っていますので、COVIDの影響ということも考えられます。

もう一つ、先ほどのスライドで、タブレットの使用頻度に関して、右端はちょっとサンプルが少な過ぎるので見ないほうがいいと思うのですが、ある程度使用頻度が高い学校のほうが、平均点は一応高いということになっています。これは、その学校でうまく使っていることもあると思うのですが、今、教育次長がおっしゃったように、今は使い方についても、我々も先生方に様々な情報を出していますし、先生方の間でも共通理解ができてきている。そうすると、学校や各クラスがうまくまとまっているかどうかが影響しているのではないかと思うんです。

例えば、クラスの中で学力差が激しいと、そこまで使えないということになって、使用頻度も下がってしまいます。使い方と、使えるクラス運営をどのようにつくるのかということを考えないといけないと思います。その上で、プラスの学力をつけるためにタブレットはどう使うのかという、そういう議論をしていかないといけないのではないかと思います。例えば、今はPBL的な授業がどんどん進んでいますから、その現場ではものすごくタブレットが活躍しています。そういうところは、学力・学習状況調査の点数に表れない学力だと思います。

○今井委員

私もICT機器の使用頻度と正答率とのクロス集計の結果を見れば、GIGA端末を導入して使正在ことによって学力低下につながっているということは、必ずしもそうではないのかなと思います。正司委員が先におっしゃってくださったのとほぼ同じ意見です。

○久元市長

タブレット端末は家を持って帰れるわけですよね。家を持って帰った後、子供たちはインターネットに自由にアクセスできるのでしょうか。

○教育次長

はい。家庭にWi-Fiの環境があれば使えます。それは学校のほうからもWi-Fi環境を整えてくださるようにということでお願いをしております。

○久元市長

ということは、子供は何にアクセスしても構わないということなのですね。

○教育次長

一応、制限がかかっておりますので、何でも閲覧できるということではございません。

○久元市長

その辺、もうちょっと詳しく教えていただけますか。ユーチューブにはアクセスでできるのですか。

○教育次長

できません。

○久元市長

そしたら、インターネットには全くアクセスできないのですか。

○教育次長

いえ、インターネットにアクセスはできます。

○久元市長

それは何らかの制限が端末の中にかかっているということですね。

○教育次長

はい、そうです、おっしゃるとおりです。

○久元市長

分かりました。

○吉井委員

少し問題提起をさせてもらったような形になってしましましたが、7ページではそういうようなデータですが、9ページを見ると、タブレットを使ったほうが、むしろ

正答率が高いというデータが出ているので、若干矛盾するデータになっているんです。ですから、正司委員がおっしゃったように、タブレットを使ったから学力が落ちているということに直結するQ & Aではないというのは間違いないなど。ほかにもかなりの複数の要素があるのだろうと思います。端末だけでいうと、先ほど出たデータのほうが、きっと直接的なQ & Aになっていると思います。では、学力が落ちているのは一体何が原因なのかということになるのだろうと思います。

○久元市長

そうしましたら、より根源的なところ。よくどこの自治体も全国との比較やランキングに关心が行くところもありますけど、今日はそうではなくて、全国的に学力が落ちているということ、これは文部科学省が考えることかもしれません、それぞれの自治体も考えないといけないですよね。どうして学力が落ちているのかについて、これは本当の正解がないかもしれません、やはり避けて通れないと思うので、学術論文の分析も踏まえて、議論いただければと思いますが、いかがでしょうか。

どうして学力は落ちているのか。繰り返しになりますけれども、教育には相当な予算がどんどんつぎ込まれているにもかかわらず、学力が落ちているということについて、国民に対して文部科学省は説明しないといけないですし、神戸市は市民に対して説明しなければいけない面があるわけです。そこはぜひ御理解いただきたいと思うのですが。

○正司委員

山下委員からしゃべっていただくのがいいのか分かりませんけれども、全国学力・学習状況調査の点数は問題の質によっても凸凹があるため、その影響もあると思います。点数の横比較は少し怖いなと思うのですが、全国の経年調査は、文部科学省がスコアという形で表現されているので、ある程度その辺りを調整されたものだらうと思って、いつもこの数字を見ています。

これを見ると、確かに令和3年度から令和6年度でガクッと下がっている。この間、

端末が普及した時期でもあるし、先ほど申し上げたようなCOVIDの時期でもあります。様々なことがあります、取りあえず結果として落ちているのは確かで、特に英語が落ちている。英語は小学校に入ったはずなのに落ちているという状況なので、教育の仕方、メニューは増えても、うまくそれが子供たちを育てるところに届いていないのかなと思うんです。特に私が今少し思っているのは、先生方の多忙化です。個別の教育と言われているけれども、なかなかそこまでできない状況になっていると。大学の教員をやっていたときに思ったのは、本当に学力に差がつくのは中学ぐらいで、中学校で取り返せば、高校、大学に上がることができます、中学で差がついちゃうと難しいなというのが大学にいた人間の感覚なんですね。そこから見ると、やはり中学校の先生が忙し過ぎるのではと思ったんです。特に今、コベカツ導入の話がある中で、部活の話と先生方の勤務時間についても議論しましたが、子供たち全員をなかなかフォローできていない現状がここに来て表になっているのではないかでしょうか。

あともう一つは、これくらいの世代の子供は、乳母車の中からスマホを見て育ってきた世代の子供たちが入ってきています。昔は子守をテレビがやっているという話がありましたが、車の中でもどこでもスマホで子守していたことのツケもあるかなと。後者のほうは検証のしようがないかなとは思いますけど、その辺りは気にはしています。

○今井委員

初めに申し上げたこととも重なりますが、学校外での過ごし方の変化は本当に大きくて、昔だったらテレビでアニメを見たら30分で終わったり、ドラマが1時間で終わって、そしたら切り替えて宿題するとかテスト勉強をするとか、テレビを見ながらも親とちょっと話したりして、その中で勉強の話にもつながったりということがありました。今のスマホとかゲームはエンドレスに見てしまう。特にスマホですと、より興味深いものをどんどん提示してくれて、時間をコントロールできない子供たちはスマホ漬けや動画漬けになってしまします。そうすれば、家で学習に向かう時間、テスト勉強に向かう時間、ちょっと復習する時間、宿題する時間がどんどん削られて、今回の

調査結果でもやはりそれが如実に出ているところだと思います。そういったことが学力全体に与えている影響はすごく大きいと感じています。

○山下委員

学力低下の要因を見つけるのはなかなか難しいとは思いますが、個人的に感じているのは、テスト内容自体がやはり昔とは大分違うという面は確実にあるとは思います。テスト問題が割と児童生徒が対応できないような、対応を難しくするような面は確実にあるだろうなと思っています。

それは、これからの中世の中に必要だからということでテストの問題になっているのですが、それに対応する授業をつくるというのは、私の立場からするとかなり難しいのではないかという気はしています。

身も蓋もない言い方をしてしまうと、社会が豊かになると、学力は割と落ちていくのではないかなとは思っています。生き方が多様になるということであり、むしろ昔のパフォーマンスが高過ぎたという面もあるのかもしれないんですね。良い学校に行って、良い会社に入って、そしたら豊かな人生を送れるという中で、子供の数も多いので、50メートル走でも、例えば10人で走るのと3人で走るのとではモチベーションが変わってくるのではないかなと思ったりもしています。

ただ、これは全て仮説にすぎないので、どの程度当たっているかということは分かりません。他方で、子供たちの様子を見てみると、ネット社会の良い面として、ボキヤブラーなどは我々の時代よりも遙かに豊かですし、美術の時間とか美術部の活動を拝見すると、自分たちのモチーフに合うようなデザインをぱっと見つけてきて、それらを組み合わせてうまく工夫するような編集能力のようなものはかなり長けてているのかなと思います。知的能力をどのように定義して、どのように測るかにもよるのかなという気はしています。

ただ、個人的にはテストで測っている以上は、そのテストもできてほしいというのは率直なところです。テストの反復練習をすればいいのかという議論に対しては、か

なり根強い反対もあるので、丁寧に議論をしていかなくてはいけないかなと思っています。

○久元市長

そうすると、全国学力・学習状況調査がそもそも信用できないものだということになつたら、学力を測る手法というのはもうないので、それはもう諦めるしかないということなのでしょうか。

○山下委員

信用できないと言うとちょっと言い過ぎかなと思うのですが、全国学力・学習状況調査は今からの社会で必要な力を想定して、文部科学省でもチームを組んで、現場の先生方の声も入れてつくってあるので、個人的には解けるようにはなってほしいですね。ただ、児童生徒にとってみたら、我々の世代がやってきたような感じでがつりと取り組むようなイメージで取り組んでいただく状況とは少し違う面があって、そこのところをもう少し手立てしていく必要はあるかなと思います。問題自体はすごく良い問題だと私は思っています。

○久元市長

ありがとうございました。

では、次に進んで、配付されたタブレット端末をどう使うかということを超えて、スマホ一般の話、使い方ですね。これはやはり使い過ぎると学力に悪影響があるということは、異論はあるかもしれないですが、大方の理解はそういうことだと考えると、学校、家庭内における子供の時間の過ごし方、あるいは家族がどう子供たちに関わったら良いのかということですよね。そこに行行政がどこまで関われるのかということですね。つまり、家庭、あるいは放課後も含めた子供たちの自由時間におけるスマホとの付き合い方ということに対して、教育委員会も含めて、行政はどう関われば良いのでしょうか。

○本田委員

以前、神戸市では、子供たちがどのようにスマホを使っていくのかということに関するフォーラムや、親子で考えるルールづくりに力入れてやっておられたかと思うのですが、そのように行政がそういうことを打ち出して、家庭で考えてもらう時間や、そういう機会を増やしていくことはすごく大事かなと思っています。

やはり、中学生、高校生を育てる親というのは、いかに子供からスマホを離すかというところで日々格闘しておられる方がたくさんいて、様々なルールを決めてもなかなか子供と折り合いがつかず、子供もそれを擦り抜けていくというようなことを毎日されている家庭も多いかなと思うので、そうやって日々皆さん頑張っておられる中で、そういった機会を行政がつくるということはすごく良いなと思います。物理的にスマホから離れる時間を提供するというところで、スマホを外して外で遊ぶとか、そういった違うサービスを導入していくというのも行政ができる事ではないかなと思っています。

○久元市長

教育次長とこども家庭局の副局長に入ってもらって、子供の外遊びに関する取組をやっていて、私は続けたいなと思っているのですが、スマホが、世の中、地域社会、市民生活を覆っている中で、これがどれだけ意味があるのかなという気も最近しました。やはりこれ続けたほうが良いでしょうか。教育次長、こども家庭局副局長、何か御意見ありますか。今、本田委員がおっしゃったのは、子供がスマホ漬けにならないようにするためには、もっと違う機会、スマホと距離を置く機会をつくっていくべきだと。そうなんですよね。神戸市はそれはやってきているんですよね。ですが、これがどこまで効果があるのかということですよ。もし御意見がありましたら、お二人いかがですか。

○教育次長

おっしゃるとおり、何とかスマホのない時間を作らとしても過ごしてほしいと思っています。本当にささやかですけれども、学校の校庭を開放したりとかして、子供た

ちが家に帰ってすぐスマホで遊ぶのではなく、学校、放課後、グラウンド、あるいは体育館などで伸び伸びと思いつ切り体を動かすような時間をということで、そういういた開放の時間も今増やしてきているところです。そこについては子供たちからも非常に好評でして、今いい傾向にあるのではないかと思いますけれども、それだけではやはり足りないのかなというふうには感じているところです。

○こども家庭局副局長

学校から帰って、公園や地域の里山、児童館などで遊んでいる子供たちの声を聞くと、外で遊ぶ楽しさを知ったり、違う世代の大学生や少し上のお兄ちゃんお姉ちゃんと関わることができたりして、そこで楽しみがまた広がったというような声もあります。そういう経験や時間をつくってあげるということは大事ではないかと思っています。

○久元市長

それは分かりますが、それがこれから広がっていけるのかということですね。

○本田委員

私も子供を持つ母親でしたが、本当に日々鬱いというか、親が諦めたら終わりだなというところがあります。大人が諦めてしまうと本当に何もなくなるというか、スマホ漬けになってしまふところはあるのかなと思うので、何かしら手を打ち続けるということが必要ではないかと個人的には思っているのですが、いかがでしょうか。

○今井委員

本田委員と同感です。様々な政策、様々な取組が、その時々で刺さるお子さんは限られているかもしれません、取り組み続けることで救われると言ったら言い過ぎかもしれないけど、様々な面で変わっていけるお子さんたち、あるいは御家庭もあると思うので、取組を継続するということは重要だと思います。ただ、そこには参加していただけない層のお子さんたちをどうするのかということも併せて引き続き考えなくてはいけない問題だと思っています。

○久元市長

そもそも大人がスマホエンドレスの世界から抜けられにくくなっているわけですよ
ね。大人ができないことを子供にやってもらうことができるのでしょうか。

○本田委員

子供って、まだ真っさらのところから始まっていると思いますが、先ほど言ってく
ださったみたいに、子供にどこかで刺さるものがあるという何らかの新しい経験をさ
せることを、大人はやめてはいけないのでないかなと思っています。私たちも、ス
マホ漬けになっているのですが、幼少期は違うところから育ってきています。でも、
今の子供たちはベビーカーにいるときからスマホを握っていると思うので、そうでは
ない世界を見せるのが親だけではなかなか難しいのではないかなと思います。子供は
成長、発達していくので、幼少期にあった何かしらの経験が、どこかで結びつくとこ
ろがあるのではないかなど、諦め切れない私がいます。

○久元市長

分かりました。

それでは、あと30分ぐらいなので、今までの議論のまとめですが、学力の低下の要
因として、スマホがあるだろうと。そしてタブレット端末の効用、学力の向上に結び
つけるためにどう使ったらいいのかというテーマ。それから、スマホから少しでも離
れる時間を持つてもらうために学校現場ではどうしたらいいのか、あるいは家庭にど
う関わったらいいのかというようなテーマに進んできたわけですが、この辺りで少し
教育長のお考えを聞かせていただければと思います。

○福本教育長

子供たちはこれまで、私が小さい頃、高度経済成長のときから始まって、先ほど、
山下委員からもありましたが、とにかく枠組みの中で競争して勝つことを目標にして
いました。我々が今後やる教育は、格好だけではなくて、子供が自分で考える力、自
主性や主体性をしっかりと身につけさせて、判断させる。今までの教育は全て受身の

形で、道をつくって、その中でより合理的に走りなさい、だったのですが、ここからは少々凸凹があっても、学校はその子が自分で考える力をとにかく授業等でつけさせていくと。その中で、早い段階で様々なことを考えさせるということをしていかなければならぬかなと少し大きな話ですが、そう思います。

○久元市長

もう少しそれぞれのテーマについて、具体的なお話も聞かせていただければありがたいですが。

○福本教育長

まず、先ほどの学力低下の話ですが、学力・学習状況調査の問題は、単純に平均できるようにはしていますが、年によって問題が違います。低下した部分の詳細については、いわゆる深く考える問題ができなくなっているんですね。先ほど山下委員からもありましたが、全国学力・学習状況調査の問題はどんどんそっちの方向に行っていっているんですね。この後の時代に役立つというようなことで、活用能力のようなことを問う問題が増えてきています。子供たちは、知識を問う簡単な問題は結構できるのですが、少しひねった問題ができなくて、特にできない子供の層が増えているので、平均が下がってきてます。

その理由というのは今も言いましたけど、全て受身だということなんです。自分で考えるとか、一段深く考えるとかいうことをしない。手っ取り早く知識さえ増えてきたら、勉強したと、先生もその気になりますし、子供もそうなります。だから、スコアのことを言うと、今問われているのは深く考える力で、特にそれができない層をどうしていくか。この辺りが一番問題かなと思います。

ICTの件は先ほど先生方がおっしゃったように、私はもう活用せざるを得ないと思っています。だから、ICTを活用することが駄目だということではないと思います。私も社会の教員ですが、例えば、世界の旅先はもう今は画像で見せられるんです。今まで行ったこともないような私が地図帳という平面だけで説明していたのが、そこ

の地形や風土とかを画像で見ることで、結構理解できたりします。今はそういう時代ですので、場面を考えてICTは活用していかなければならぬかと思います。

○久元市長

スマホに対する向き合い方として、今、子供たちの外遊びとか、スマホよりももっと面白い世界があるということを提供することをやっているのですが、それ以外にどのようなことが考えられるでしょうか。

○福本教育長

遊ぶ場所やできることはもっと多角的に提供できると思います。校庭を開いていますが、全ての学校が開いているわけでもないですし、体育館も、夏は、あれは究極の木陰だと思うのですが、ずっと扉が開いていて、体育館で遊びたいと思う子が遊べているかというと違います。我々教育委員会が持っている資源についてはできる限り提供しながら、同時に子供たちにしっかりと考えてもらうような、なかなか簡単ではないですけれども、そういうことをつくっていくのが一番だと思います。

○久元市長

教育委員会では、校庭とか学校の開放、子供たちにできるだけ使ってもらうようにするということが教育長からありましたが、市長部局ではできそうなことはありませんか。企画調整局長、こども家庭局長、いかがでしょうか。

○企画調整局長

子供たちが集まって、今、教育長おっしゃったような自分で考える力をつけるということありますと、創造的な発想を持ってもらうような授業はこれまでやってきたところではあるのですが、ああいったものの機会をつくるとか、体を動かすだけではなく、室内でもできるようなプログラムを、他都市の例を見ながら考えていくということも一つの方法としてはあり得るのではないかと思っております。

○こども家庭局長

子供たちがたくさん学童保育を利用するようになっていきますので、できるだけ学校

を使わせていただき活動ができるようにと思っております。具体的には、夏休みに学童保育の子供たちが体育館を使えるような取組を今進めておりまして、非常に暑い夏に、運動ができて気分転換もできるということで非常に喜ばれています。学童保育が学校で過ごすことにより、児童館が空いてきますので、児童館のほうに一般の子供たちも来るようになっています。そういう地域の資源、学校も含めて使いながら、子供たちが様々なやりたいことを実現できるように、環境づくりに努めていきたいと思っております。

○久元市長

神戸市は児童館を「こどもっとひろば」として充実をさせてきているのですが、児童館の中で子供はスマホを使っても良いのでしょうか。

○こども家庭局長

学童保育の子供たちは宿題をしますので、Wi-Fiを利用できる環境になっています。それ以外の子供たちは一応、パスワードをかけていますので、使えるようにはなっていないという状況でございます。

○久元市長

分かりました。そうすると、そういう子供たちにスマホ以外にも面白いことがあるということを提供すると。教育委員会も市長部局も。それとスマホがやはり相当発達に悪影響があるということを理解してもらうことも必要でしょうね。

そこで20ページの川島隆太先生の報告の中に、スマホの使用は脳の前頭前野、思考・判断・記憶をつかさどる部分の発達に影響を及ぼす可能性があると。これは子供だけではないかもしれません、脳も含めて、要するに身体的な悪影響が科学的にもあるということを川島先生もおっしゃっているわけですが、ちょっと専門的な話になるので、本田委員にお尋ねするしかないのですが。

○本田委員

私も専門というほどではありませんが、ちょうど今年、仙台で行われた日本小児看

護学会の教育講演で川島先生がこのお話をされていたんです。もちろん看護師だけではなく、市民公開講座でしたので、たくさんの市民の方が来られて、川島先生のお話を聞かれていました。市民の関心も高く、私たち看護師もこのスマホの脳への影響ということをすごく勉強させていただいたところであります。スマホがどういう影響を与えていたかというような調査や、生物学的なものも今どんどん増えてきておりますので、こういったところから、親御さんにも分かりやすく伝えていくことは大事かなと思います。

このときもすごく分かりやすい言葉で言っておられたのですが、人間が金魚のようになってしまふと。スマホのせいできょろきょろして、10分も集中できなくなるというお話をされていました。というのは、最近のスマホというのは、動画とか何でもころころ変わるようにになっている。だから例えば、何かを1時間見るとか1時間集中するということが子供はどんどん苦手になる、そういう影響があるというお話をされていました。そうなると、先ほどのじっくり考える問題とか、そういったところに影響があるのではないかと個人的には思っていましたので、こういった情報が皆さんに伝わるようにしていくことも大事かなと思います。

○久元市長

すみません、素人なので率直に素朴な疑問を聞くのですが、どんどん変わっていくことが身体的に影響があると。私もよく分かりますが、自分の経験に照らせば、例えばテレビのサスペンスドラマでも、初めて見るサスペンスはストーリーが分からなくなるんですよ。なので、巻き戻しをしないと分からなくなってしまうんですよね。ところが、最近は早送りして見るでしょ。あれ分かるんですかね。早送りをして見るのがマジョリティな世界になると、私みたいに巻き戻さないと分からない人間はマイノリティになるわけですね。スマホの中でどんどん瞬間にシーンが変わっていくことが普通になれば、スマホの世界が普通の世界で、リアルな世界がむしろ縁遠い世界になっていく可能性があるのではないかと思いますし、そうすると、スマホの弊害と

いうことを幾ら川島先生に来てもらって話をしてもうんといふようなことにはならないですかね。

すみません、これはどなたかに聞いていい話でもないかもしれません。

○本田委員

先ほど、山下委員が言わされたように、今までよしとされていた、学力とかの評価が変わるものではないかということ似ているかもしれません、今後、世の中がどういう能力を求めていくかということは確かに時代とともに変わっていくのかなと思います。ものを考えて発信していくところの根本が変わるとは思えないと私は個人的には思っているんですが、今までだったら、暗記力といったようなところがすごく評価されてきたところが、様々な能力が評価されるようになるのではないかと思います。この学力検査では出てきていないけれども、タブレット端末を使うことで、例えば、子供たちのプレゼンテーション能力や編集能力とかはすごく長けてきたのではないかと思います。

○山下委員

個人的にはすごく楽しい議論になってきたなと。学者冥利に尽きるなと思いながら、今お話を伺っていました。

市長が危惧されたような状況をお伺いして、なるほどと思いながら考えていたのですが、例えば50年後にそういう世界が訪れたとしたら、それはもう今の子供たちがつくった世界なので、僕らももう口出しする権利もないし、すべきでもないと思うんですよ。僕らはもうそこの段階では諦めるしかないのですが、今その時間と空間と一緒にしている大人の世代としては、看過できない部分はやはりしっかりと看過できないと言うしかないと思います。もしかしたら、効果はないかもしれません。

今お話を伺いながら思い出したのが、大学の授業の在り方についてです。これまで私は、私語との闘いだったのが、いつの間にかスマホとの闘いになって、もう闘いではなく、敗北しているのですが。この間、僕らがやってきたのは何かというと、撤退

戦を戦ってきたつもりなんですよ。つまりもうこれは仕方ないなと。これは負け戦なので、どう負けるかを考えて、少しでもとどめていこうとしてきたのですが、そう腹をくくっていざ学生さんと付き合ってみると、様々な新しい発見もあったりしたんですね。お互面白いことも起こったりして。先ほど市長がおっしゃられたように、そういう早送り世代が中心になるかもしれないですが、おそらくその中で、今度は希少価値として巻き戻すことも値打ちが出てくるかなと。逆にマーケットバリューが出てくるかなという気もしていまして、これはそういったような余裕も持ちながら、負け戦を楽しく闘っていくというような気持ちでもいいのかなと。負けるというわけでもないのですが、それが結構上の世代の宿命というか、覚悟して負わないといけない責任かなと思います。

その意味では、神戸市がやっていることは案外、大人の責任の範囲と質を少し転換していこうということを先取りしてやっているような気がして、僕は結構、教育学の観点からは非常に興味深いなという目で見てています。

あと、もしやることがあるとすれば、例えば、先ほど教育長がおっしゃっていたのですが、子供たちが主体性を持つとすれば、自分がスマホをどのように使っているのか。同じ時間があったら一体何ができたのかとか、何かそんなことが集約し、記録していくけるようなアプリの開発や普及とか。あるいは、スマホ断ちしてみたというようなお子さんがおられたときに、そういう自発的な使用制限の事例について、失敗例でもいいと思うのですが、そういったことの蓄積と普及はやっていけるかなとは思っています。

○久元市長

スマホを使う人たちがもう圧倒的にマジョリティで、スマホ断ちをしましたと言った途端にいじめにあつたりしないのでしょうか。大丈夫なのでしょうか、真面目な話。

○山下委員

それはあり得ると思います。ただ、子供には、何かそういうようなことをやった子

を、あまり排除しない雰囲気もあって、え、やってみたんや、どうやったんというような形で個性を尊重し合って、話を聞くような子もいるみたいなので、そういった可能性に少し賭けてみたいかなと。そもそもがスマホはすごく多面的で、もはや事務用品みたいな面もあり、それを使わざるを得ない面もあって、その中で、スマホを使うことのカテゴリーをちょっと分けていくようなことが子供さんの中で生まれてくるようなことも期待できればと思うんですけど。そういうことが起こらないようにするのは我々の務めであると思いますし。信じつつも、きっちり介入するという形かなと思いました。

○久元市長

山下委員が先ほど、昔の子供たちに比べて、今のはうがプレゼンテーション能力があるというようなお話をされました。そのプレゼンテーションもインターネットを使えば簡単に検索でき、探すのももう極めて楽になり、AIを上手に使えば、クリエイティブに見えるものがつくれるという世界になったときに、教育長がおっしゃる、本当の自分の内面から出てくる主体的な意思に基づく、あるいはその人間に身体的に備わっている感性に基づくクリエイティビティというものは、それはもう過去のものとなつていって、新しいクリエイティビティの世界が生まれつつあると考えればいいのでしょうか。

○山下委員

私に答える責任と資格があるかどうか分からないのですが、今、個人的に悩んでいるのが、学生さんたちに書いてもらうレポートですね。実は、心のどこかではもうAIを使ってもらっても良いという気持ちもあるんですよ。ただ、それで生み出したものがどういう意味を持つのかということは、お互い一緒に考えてみようかということはやってみたくて。

じゃあどうしているかというと、いつもやっているのは、はい、紙に手書きで書いてくださいねと言って渡して、A4を一枚きっちり埋めてもらう。久々にシャーペン使

ったという言葉を聞きながら埋めてもらっているんですね。僕らの世代としては、今、市長がおっしゃったような自分の感性に基づく内面からの経験を経て、それを知性によって言葉に紡いでいくということは、自分個人としてはすごく大事にしたいと思いますし、それは、将来多分なくならないかなとは思うのですが、我々が必要だと思う限りにおいては、申し訳ないけど無理強いさせてという、介入していく姿勢で位置づけていきたいとは思います。

○久元市長

今は、大学の先生もAIをどんどん使って、AIをいかに上手に活用するかということによって、学生の能力を評価するというような動きも最近入ってきてているようにも感じましたが、その辺、正司委員何か御存じでしょうか。

○正司委員

詳しくは知らないのですが、やはりAIを道具だと割り切れるかどうかだと思うんですよね。最初、ウィキペディアができたときに、それにだまされたレポートがたくさん出てきて笑っていましたけど、それがだんだんレベルが上がって来て、今はAIになって、こちらも見分けがつきにくくなっているという。ただ、学生に言いたいのは、スマホもそうですし、AIもそうですけど、ものすごくすばらしくて、良い道具なんだけど、あくまで道具であり、それに使われる自分はちっとも楽しくない、AIをつくる人間になろうということを教えたいと思っています。

○久元市長

私は正司委員と全く同じ価値観に立つのですが、世の中はどうも先を行っているところがあるって、国のITの基本計画の指針の素案では、AIと人間が対等に立った関係を構築するということが言われているんですよね。つまり人間がAIを使いこなすのではなく、AIを人間と独立した存在として、イコールの関係をつくっていこうと世の中がなってきているとも言えると。

今日の議論は、あと10分弱しかありませんが、子供たちを含めた、私たちをめぐる、

AIを含む様々なテクノロジーがどんどん進化して変化していくという混沌の時代の中にはあって、ここは絶対に子供たちに守ってもらう、絶対に子供たちにはここを大切にしてもらうというところをつくっていかなければいけないのではないかと個人的に思います。

そういう前提に立つことができるのかどうかということと、同時にスマホが様々な課題があるということについて、より幅広く、子供たち、そして、保護者、教育関係者も含めて、できるだけ幅広い見地から、幅広い価値観に基づく問題を相互に提起しながら議論する場があってもいいのではないかでしょうか。できるだけたくさんの人々に参加していただいて。先ほど本田委員からお話をありました、仙台の話もかなりたくさんの方々が参加されたと聞いています。市長部局と教育委員会が共催をして、一回そのようなことをやってみたらどうかと。スマホとの向き合い方でも良いですし、AIがどんどん進化していく時代にあって、子供たちとスマホはどういう関係を築けばいいかとか、テーマは何でも良い、その類いの話ですよ。そのようなことを一回やったらどうかと思いますけど、どう思われますか。今、勝手に言っているだけですが。

○今井委員

今、市長がおっしゃってくださったフォーラム、すごく賛成だと思います。そういう機会を通じて様々な人に興味を持っていただくだけでもいいと思います。より実のあるものにするために、例えば、できれば事前に広くアンケートなんかも取って、今の実態やリアルな声をより多くしっかりすくい出した上で、より実のあるフォーラムにしていけたらいいなと今ぼんやり考えています。

○吉井委員

私も大賛成ですね。一つは、やはり先ほど市長も気にしておられましたような医学的見地からどういうような影響を与えるかということも、専門家の方からしっかりと説明いただくのは非常に大事なことだろうと思います。ぼんやりと2時間以上すると駄目、4時間すると駄目という話ではないと思うんですよ。ファクトに基づいて説明

をするということは非常に大事ではないかと思いますので、ぜひそういう機会を持たれたらと思います。

○久元市長

自治体の中には、スマホの利用時間を2時間以内にすることを推奨するみたいな条例を制定しているところがあります。最終的には議会が判断することですが、私自身はそういう条例は提案するつもりはなくて、もっと議論が要るのではないかという気がしていることもあります。フォーラムのことを提案させていただきました。子供たちと一緒に向かい合っておられるのは小・中学校の教員の先生方ですよね。ぜひ教員の先生方にも参加いただきたいと思います。教員を代表して発言をする方を見つけるのはなかなか骨が折れるかもしれません、できるだけ先生方にも参加いただきたいと思います。教育長いかがですかね。

○福本教育長

この問題は子供を巻き込まなければならぬと思っています。契約するのは親なので、今までの我々学校の議論は、親が悪いから契約するのだと。親が契約しなければ、携帯電話は問題にならないというのが我々の議論だったのですが、先ほどからもありますように、もう子供達が考える時代になってきていますので、本当に深く考えることができるように、教員も保護者も参加するような形になればいいなと思います。

○久元市長

ありがとうございました。

教育委員会事務局から紹介があったように、「スマートスマート都市KOBE」というものを始めたのは、スマホフォーラムというのを行い、そこでの議論を踏まえたものです。その後、教育委員会ではアンケートや、「賢いネットキャンプ」はこども家庭局ですかね。あとは、高校生と中学生の合同フォーラムやワークショップもやっていましたが、もうちょっと子供も大人も入ってもらって、子供と大人が対等に一緒に議論をすると。先生も子供も、それから学識経験者も行政も一緒に議論するとい

うことは成り立ちそうでしょうか。この辺は山下委員と本田委員にちょっとお伺いしたい。

○山下委員

おそらく成り立つと思います。やってみないと実際には分からぬのですが、やるべきかどうかで考えると、おそらく確実にやるべきかなという気がします。やはり我々の姿勢をしっかりと分かってもらうことが必要で、直接価値観を押しつけるのではなく、心配しているのだという姿勢を見せて、かつそれを共有していただける市民の多くの皆さんをちょっと募っていく必要もあると思います。さらには、反対の御意見とか、そんなの時代遅れだという御意見もあると思うんですよ。そういうことをきっちり出し切ってもらうことのほうがすごく大事で、もしかしたら、その場では反論ができないかもしれない、あるいはお互いちょっと嫌な気持ちになるかもしれませんけれども、また考え続けて次の価値観を生み出す原動力になっていくと思うので、世代を超えてやっていく必要があるかなと思いました。

○本田委員

私も教育長が言わっていたように、子供を巻き込むべきだと思いますし、子供がスマホを使いたい目的だったり、今後、どのような大人になりたいかという彼らの主張も聞かないといけないのではないかなどと思います。そこで議論をぶつけることによって、一つの答えはきっと見つからないと思うのですが、意見を出すということがやはり大事ではないかなと思います。

○久元市長

ありがとうございました。

それでは、そろそろ議論はこの辺で閉じたいと思いますが、ほかありませんか。

今日はとにかく非常に平凡な結論かもしませんが、この問題については一定の方向性を決めるのではなくて、非常にもうカオスの時代に我々来ているわけですから、山下委員からお話がありましたように、もうとにかくできるだけ議論を出し切っても

らうような機会をつくる。1回で解決できるわけではありませんが、そういう機会をつくるって、できるだけ議論をこれからいろんな場面で続けていって、その上で、子供たちのスマホの悪い影響をこの際紹介していく取組に結びつけていければということを今日の結論にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、マイクを事務局にお返しします。

○企画調整局大学・教育連携推進課

本日は活発な御議論をいただきまして、ありがとうございました。本日予定しておりました議題は以上となりますので、これをもちまして、令和7年度第2回神戸市総合教育会議を終了とさせていただきます。本日はお忙しい中、大変ありがとうございました。

閉会 午後2時57分